京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十五卷 第五號

昭和十七年十一月

論叢

最近に於ける佛印經濟の再編成に就いて……經濟學博士 松岡孝兒

大東亞戰爭勃發後の上海の金融界……經濟學博士 小島昌太郎

商品群に對する需要……經濟學士 青山秀夫

强制カルテル再論……經濟學士 靜田均

時論

新豫算と增稅問題……經濟學博士 汐見三郎

研究

有島武の經濟策論……經濟學士 堀江保藏

說苑

分化と進步……經濟學士 出口勇藏

附錄

彙報

說苑

分化と進歩

出口勇藏

一

近世の歴史觀を特色づけてゐる「進歩の理念」は近世の社會思想の上に指導的な役割を果たしてゐる。「進歩とヒューマニティ」や「進歩と民主主義」は近世の社會思想の合言葉であつた。このやうな合言葉が、思想の上にも生活の上にも、疑ふを要しない自明性を有つと考へられることができたのは、いかにしてであつたであらうか。主知主義と個人主義とを、現代のひとはこの疑問に對する解答として用意してゐるにちがひない。この解答はもとより正しいのであるけれども、「進歩とヒューマニティ」や「進歩と民主主義」などの合言葉を直接に裏づけてゐるとともに、主知主義や個人主義がそれに流れこんでゐて、主知主義や個人主義と上の合言葉とを媒介してゐるものは、「分化」(division, Differenzierung) と云ふ事態ではないかと思はれる。分化は、思想の上にも社會生活の上にも、近世をそれに先立つ時代からきわ出たせてゐるとともに、恐らくはまた次の時代からも區別するであらう著しい現象である。科學の微細なる部門への專門化、職業の分化、人間相互の關係の分化、などの事實は我々の日常の體驗であり、我々の生活をそれに對應させるべく强制してゐる社會の重壓であると云つてよい。併しながら、今や全世界をつつむ砲門のとどろきのかげに近世に對する弔鐘は鳴り亙り、生れいでようとする新しい時代の到來が告知されてゐる。飛行機の爆音は、近世のひたむきな分化の諸相の結果からの人間解放と新しい綜合の下にその結果を刈り取り收めることとに向つて、我我の思索と生活とが急激に今一層深められ再編成されるべきことを、促してゐる。もとより近世においてすでに、分化に伴ふ弊害に對して人々はしばしば警告を發したしまたそれへの對策を色々と考究して來た。「協

働」とか（J・S・ミル）「教養」とか（マシウ・アーノルド）「社會的連帶性」とか（デュルケム）を强調することによつて、分化における調和が主張せられ、進歩思想は辯護されて來た。[1] それらの主張はいづれもそれぞれの眞理を有ち、分化に伴ふ社會の分裂を防止するに役立つものであつたであらう。けれども今や、このやうな對策を以つてしては、近世社會の崩壞は遂に免がれえないと云ふことが、如實に示されてゐるのではないであらうか。

我々は思索と生活とに向つて課せられてゐる綜合の問題に對して積極的な解答を提出するよすがにもと、進歩主義的歴史觀が本來分化と進歩との關係をばどのやうに把へて來たか、と云ふことに探索の眼を向けることを、無意義ではあるまいと思ふ。けだし、このことによつて、分化や進歩や上記の近世の合言葉の意義やまた今までに考へられて來た分化の擁護論の抽象性が明白になるだらうからである。

二

進歩主義的歴史觀を體系づけた人はテュルゴであり、その思想を通俗化するとともに異常に普及し、この歴史觀の社會的擔當者であつたブルヂョアジーの躍動を通して近世の思想や社會に著しい影響を與へた人は、コンドルセであつた。[2] 從つて分化と進歩との關係は、とりあへず、この二人の思想の中から汲み取られることが必要である。

テュルゴにおいて世界史の推進力と考へられてゐるものは、技術と結びついた經濟とキリスト教とであつた。技術とは彼によれば「自然の使用」であり、人間の慾望のために自然科學的認識を適用することによつて獲得される知識にほかならない。この技術と結びつく經濟とは、經濟生活の全領域を指すのではなく、テュルゴが明瞭に述べてゐるやうに、實は「商業精神」なのである。彼が世界史の展開過程の「截斷面」として「政治的世界圖」の系列を描くに當つて、絶えず「地球上の一般的流通」の狀況に注意を拂つてゐるのは、商業精神において表現されてゐる技術と結びついた經濟の世

1) J. S. Mill; Principles of Political Economy. Mathiew Arnold; Culture and Anarchy. Émile Durkheim; De la division du travail social.
2) テュルゴについては本誌昨年十二月、本年五月および六月號における拙稿を、またテュルゴとコンドルセとの歴史觀の構造については、本稿とほぼ同時に現

界史の展開に對する役割を認識してゐたと云ふことを證據だててゐると云つてよい。ところで商業とは元來生産と消費とが、場所的に、時間的に、また人格的に、分裂することによつて、その存在理由を有ち、經濟が商業精神によつて代表されると云ふのは、分裂した生産と消費との媒介機能を果たすにすぎぬ商業が生産と消費とから獨立して個有の精神を有ち、從つて個有の人格によつて運營されるに至るのみならず、更に重要なことは、商業の擔當者が逆に經濟生活の本來の兩つの對極である生産と消費とを、自らの計算において、支配するに至つてゐると云ふ事實を示してゐる。從つて商業精神によつて世界史の動きがはじまると云ふことは、經濟生活における生産と消費とが、その分裂の媒介項たる商業自體の利益のままに、ますますその分裂ないしは分化の程度を推し進めることによつて、歴史は動く—進歩する、と云ふ意味にほかならない。彼は商業精神のあるところ人間の自由が確立されると述べてゐるが、この自由も人間が本來の血緣的あるひは地緣的集團から、解き放たれて成立する個人的な自由であり、自由の確立はとりも直さず社會よりの個人の分化である。テュルゴが分化を以つて進歩の指標としてゐるのはただに經濟に關してのみではない。科學について政治についてまた道德について、彼は屢々分化によつて隨伴すると信ぜられる進歩について物語つてゐる。分化こそ歴史を動かし科學や社會の進歩に貢獻する發條だつたのである。

しかるに他方において、テュルゴではキリスト教が商業精神とともに世界史の推進力であつた。それは人間に「神の愛」を知らしめることによつて、人間性の自覺を培ひつつ、人間相互を眞に結びつけ社會の分化を一層高い次元において綜合すると云ふ役割を果たしてゐた。ところでテュルゴに續いて進歩主義的歴史觀の普及に與かることの多かつたコンドルセにおいては、この歴史における宗教の役割は跡方もなく消え失せてゐると云つてよい。彼は急進的な理神論者として、師のテュルゴを「臆病な理神論者」だと考へてゐた。從つ

れる「歴史學研究」の歴史觀特輯號における拙稿「フランス啓蒙時代後期の歴史觀」を參看せられたい。

て彼によれば、宗教は恒に「偏見」—之は進歩の阻害原因に與へられる總稱である—を生むものであつた。そして、コンドルセでは、上述の分化こそが進歩の原因であつた。彼の歴史觀はテュルゴほどの理論的な奥行を有たぬ通俗的なものであるが、彼の歴史に對する根本的な態度は、自然認識をできる限り社會や道德に適用することによつて、認識しようとした點にあつた。[2] 彼みづから優秀なる數學者として「社會數學」と云ふ科學の創建に深い關心を懷いてゐた。啓蒙時代の自然科學諸部門の著しい分化と進歩とは、彼に、社會に對しても、同樣な分化こそが進歩の原因となるはずである、と希望させずにはおかなかつたのである。彼は世界史を十期にわかち、その第九期の現代史を描くに際して諸々の自然科學上の發見と進歩とを說き、「分化してゐる諸科學がおし進められると相互に接近し相互の間に接觸點がつくられずにはおかない」[3] と述べてゐる。彼においては分化に伴ふ進歩は自然科學についてのみ事實であるのではなかつた。藝術においても同じ事態が實證されてゐる。要するに「人間のあらゆる知的職業は、その目的、その方法、もしくはその働く精神能力においてそれらがいかに異なつてゐようとも、競合して人間の理性の進歩にあづかるのである。」[4] かくて職業の社會的分化すなはち社會的分業は知的進歩の根源であつたのである。同じことは人間の社會的存在についても云ひうべきである。そこでは社會の分化に伴つて人間の平等が、個人間において一國内部においてまた國際間において、無限にひたむきに進歩しなければならなかつたのである。このやうにコンドルセは分化と進歩とに關して徹底的な樂天主義を奉じてゐた。

テュルゴとコンドルセとの歴史觀を通じての分化と進歩との必然的な關係は、大凡以上のやうに概括的に傳へて誤りはないであらう。

三

社會的分業による社會的進歩の思想は既にコンドルセにおいて現れてゐた。商業精神による經濟生活の分化が歴史の進歩にあづかると云ふことも既にテュルゴ

2) 詳細は前掲拙稿「フランス啓蒙時代後期の歴史觀」にゆづる。
3) Condorcet; Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain (Œuvres tom. 6, p. 218).
4) ibid. p. 230.

において見られた。しかしマヌファクトゥールにおいて實現してゐた勞働の分化すなはち分業がはじめて科學的に取り上げられたのは、デュルケムが云ふやうに、アダム・スミスによつてであつたらう。スミスにおいては、分業は人間能力の不平等の結果であるよりむしろその原因であり、人間の交易する性向によつて促進されてゆくところの個人の意識を越えた社會的な事實であつた。分業は生産力を增大せしめ社會の進歩にあづかるものであるけれども、しかし他方において、弊害を伴ふと云ふことを、スミスの慧眼は見逃しはしなかつた。彼は勞働する貧民の文明社會における分業による人間的能力の喪失を憂ひ、その豫防策を講ずることを政府に要望した[1]。これは周知のことがらである。同じく進歩主義歴史觀を懐きつつも、コンドルセにおけるやうな素朴な樂天主義に墮さなかつたことは、スミスの立場の一層の具體性を示す一つの證左であるにちがひない。

併しながら、スミスの要望にも拘らず、近世國家の政府はその豫防策を講じえたであらうか。さうではなかつたことは歴史みづからが雄辯に物語つてゐる。理論的に云へば、スミスにおいてもテュルゴにおけると同様に、分業は流通過程における人間性から演繹されてゐたと云はなくてはならぬ。ただマヌファクトゥールに於ける生産の技術的な共同性の外觀は、スミスをしてテュルゴよりも一層具體的に、勞働の分化の背後にある勞働の共同すなはち協働の事實を、認識せしめたと云ふべきであらう。そしてテュルゴにおける技術に結びつきそれを支配してゐる「商業精神」が、スミスにあつては、資本主義的な生産技術を呑了することによつて、「資本主義的精神」に轉化してゐると云つてよいと思はれる。分業は飽くまで流通部門より起り、社會の進歩は分化より生ずると考へられてゐるのである。そして政府のなすべき事柄は、分化を生ぜしめる根源に遡つてそれを企劃することではなく、個人の自由なる商業精神ないし資本主義精神—これこそが自づと自然的進歩を結果するものである—の赴くがままに

1) Wealth of Nations (Cannan's Ed. Vol. II, pp. 367—268).

放任して干渉を加へることなく、ただその結果の正義にもとり國家の安危に關はる限りにおいて、後より調整の劈を執ると云ふことだけである。このことは近代國家の政府に一般的な本質的な機能であると云はなくてはならないであらう。從つて分化に伴ふ進歩に對する樂天主義的な信條はスミスの場合にも等しく見られるのである。

歴史は果たしてこの信條を裏切つて進んだ。經濟生活のみに限らず生活のあらゆる部面において、ひたむきな分化に伴つて一面においては新しい境地が展開されてゆくに對し、他面においては分化は人間に對して、物質的に精神的に、重壓を加へて行つた。分化は生活を云はば外延的に擴張せしめたけれども、内包的には一面的にし抽象的にしなければならなかつた。一例をとつて云へば、近代の民族は、個人に分化することによつて民族的な偏見や束縛から自由な個人となり國際間の障壁を突破するコスモポリタンとなり、ヒューマニティーの意識を有ち（はじめにのべた「進歩とヒューマニティー」や「進歩と民主主義」などと云ふ近世の合言葉はこの事態を物語つてゐる）、それに伴つて文化は鄉土的狹少を越えて人類文化の擴散と普及とを結果した。けれどもその反面には、人間は本來の民族的な意識を喪失し抽象的な自由をしか有ちえず、文化は人類文化に擴散することによつて平板となり、個性的な國民文化の相互聯關の内に成立する豐穣なる世界文化は決して成り立つてこなかつたのである。科學の分化に伴つて、コンドルセが云ふやうに、おのづから「接觸點」が見出されはしなかつたことも同樣である。一般に經濟と云はず文化と云はず、流通面ないしは交渉面の自然的成り行きからは、分化に伴つての綜合と云ふものは成り立たない。それゆゑ、分化に伴ふ進歩と云ふことには究極的な保證は存在せず、却つて逆に分化が進歩の阻害原因とならざるを得ないのである。

進歩は分化と綜合とが、共に意識的に計量されることによつて、内的聯關を以つて保證されることによつてのみ、齎されるであらう。進歩主義的歴史觀におけ

る分化は、個人的主體の計量に基く自然的結果であり、綜合は更にその偶然的な結果であるにすぎぬ。綜合をも意識的に計量しうるものは、超個人的な或る主體の意慾でなければならないであらう。それは最も具體的には國家の意慾でなくてはならないであらう。しかしこの分化と綜合との意識的な計量の任に、近代國家は堪へえたであらうか。また本來堪へえるものであらうか。自然主義に對抗して現れた歴史主義の一つの動機は、「國家は他の國家に對して國家である」と云ふ國家意識であつた。そしてたとへばフリートリッヒ・リストがスミスの分業の理論に對して生産力の理論の建設を圖つたのは、自然主義における分化と進歩との聯關に對する盲信への懐疑から生じたものであつた。たしかに之は分業の反面の協働を國家の意慾によつて促進せしめようとする意味をもつてゐたと云へよう。けれどもリストの國家意慾も近代國家の意慾である限り、おのづから制限を有たざるを得ないのである。なぜなら、近代國家の本質は、飽くまで個人の意慾を前提し、それより生ずる結果に對してのみ調整の勞を執つたり、個人の意慾の妥協を圖つたり、個人の利益と相反せざる範圍において指導的な行動を執つたりするにすぎないものであるからである。個人の主體性による分化を國家の主體性によつて綜合しようと云ふ思想は、歴史主義の側からばかりではなく、コンドルセの遺髮を繼ぐコントの場合にも見られるところである。彼は次のやうに云ふ「政府の社會的目標は、人類發展の原理そのものの避くべからざる結果である、觀念や感情や利益の基本的な分散へと向ふこの致命的な傾向を十分に抑制し、できるだけそれを防止することのうちにあるやうに私には思はれる。この傾向は、もし妨げられることなく自然の成り行きを辿るとすれば、遂には、どうしても、凡ての重要な點で社會の進化を停止せしめねば止まないであらう。[2]」この配慮もまた、本質的には、スミスの政府に對する上述の要望と何等異なるところを有つてゐない。それらはいづれも、政府の活動が分化に伴ふ生活の分散を後から調整するにす

2) Comte; Cours de Philosophie positive IV, (Durkheim; De la division du travail social p. 349 の引用による).

ぎずして、分化と綜合とを共に意識的に計量しえないのである。

この點ではたとへばステュアート・ミルの「協働」論は近代國家の本質をよく見拔いての理論と云つてよい。彼は協働をば、分業とひとしく、個人の主體的意慾に期待した。企業者と企業者、勞働者と勞働者、更には企業者と勞働者との意識的協働が社會的連帶性を强固ならしめることに、彼は望みを託したのである。デュルケムも亦、『社會分業論』において、國家の活動に綜合能力を認めえずして、「職業組合」にそれを委託しようとした。しかしながら、かやうな提案はいづれも、有機體的國家論の齎すところであつて、部分的主體性による綜合によつては、遂に部分的な綜合が得られるにすぎず、近代的分化に伴ふ弊害は遂に矯正されるには至らないのである。またマシウ・アーノルドは「教養」を以つて近代的分化に伴ふ無政府狀態を救濟しようとする。彼において教養は必ずしも非實踐的な知識を意味してはゐない。けれども教養が所謂輿論を喚起しそれが無政府狀態の矯正を導くと考へる限り、民主主義的な思想の本質的缺陷によつて、綜合は具體的に實現するとは云はれないであらう。

近代的分化の結果を綜合しうるのは、分化と綜合とを共に意識的に計量しうる新しい國家でなくてはならないであらう。分業は國家意慾に歸趨し國家意慾より再び流出する職分とならなければならぬ。その時、部分的な主體性を有つにすぎぬデュルケムの職業組合も、全體的主體の意識的擔當者として有效に分化に伴ふ綜合の實を擧げることを得るであらう。同じことは科學の研究についても當然云ひうべきである。科學はひたすらなる分化によつて進歩するのではなく、分化とともに綜合が不斷にくり返へされる時にのみ、眞の進歩が期待されるのであつて、今日、綜合研究の必要が叫ばれるのは、正に現在の歴史的危機に科學が直面してゐるからなのである。

綜合の問題は、それゆゑ、新しい國家論の問題につながつてゐる。ここにおいて我々は、テニルゴにおい

ては意識せられてをり、コンドルセにおいては無視されて近世社會に瀰滿した宗教と進歩との問題を思ひ起して、深い反省を行はねばならないと思ふのである。テュルゴにおける宗教が、アンシャン・レヂームと結びついてゐた第二階級の殿堂と云ふ意味を有つてゐた限りにおいて、コンドルセによつて斥けられたのも無理がないであらう。けれども國家が國家であり、進歩が進歩でありうるのは、却つて國家を越え進歩を越えてる境地によつて包攝されることによつてではないであらうか。「資本主義的精神」ももと、近世の宗教との密接な關係の下に生じたことを我々は考へなくてはならない。綜合の問題は、それゆゑ、實は國家を越えた宗教の立場から具體的に可能になると云はねばならないのではないであらうか。

かやうな問題を、この短文において詳しく論ずることは、もとより不可能である。我々が進歩主義的歴史觀における分化と進歩との關係を分析して、それが現代に課してゐる問題を若干明かになしえたならば、本稿の目的は果たされたのである。（二六〇二・十）